

右条々はみなもって信心のことなるよりおこりそうろうか。故聖人の御ものがたりに、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおおかりけるなかに、おなじく御信心のひとも、すくなくおわしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことそうらいけり。そのゆえは、「善信が信心も、聖人の御信心もひとつなり」とおおせのそうらいければ、勢観房、念仏房なんどうす御同朋達、もってのほかにあらそいたまいて、「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、ひとつにはあるべきぞ」とそうらいければ、「聖人の御智慧才覚ひろくおわしますに、一ならんともうさばこそ、ひがごとならめ。往生の信心においては、まったくことなることなし、ただひとつなり」と御返答ありけれども、なお、「いかでかその義あらん」という疑難ありければ、詮ずるところ聖人の御まえにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をもうしあげければ、法然聖人のおおせには、「源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらざる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」とおおせそうらいしかば、当時の一向専修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともそうろうらんとおぼえそうろう。いずれもいずれもくりごとにてそうらえども、かきつけそうろうなり。

第4組 極樂寺住職

巖城 孝憲

text by Takanori Iwaki

後序 如来よりたまわりたる信心

『歎異抄』の後序において、歎異篇（あるいは異義篇）の八章全体を総括して、「右条々はみなもって信心のことなるよりおこりそうろうか」と著者唯円は、問題点を押さえ、そして、信心一異の御相論を、それについての師の教えとして述べている。この御相論のことは、覚如上人の『御伝鈔』にも記されている（聖典七二九頁）。法然上人の吉水教団で、親鸞聖人によって提起された重大な御相論が三件あったことが伝えられているが、そのうちの二件が『御伝鈔』に記されている信不退行不退の相論（上巻第六段）と、今のこの信心一異の相論（上巻第七段）である。あとのひとつ体失不体失往生の相論は、覚如上人の『口伝鈔』に記されている（聖典六六五頁）。

覚如上人は、宗祖の孫である如信上人から多くのことを学び、唯円からも多くのことを学んでいる。年表には（聖典一一三九頁）、「一二八七年（親鸞滅後

二六年) 覚如、上洛の如信に法義を学ぶ」「一二八八年(親鸞滅後二七年) 河和田の唯円上洛。覚如、法義を学ぶ。(『歎異抄』、この前後に成るか。)」とあり、『歎異抄』については、この時に、覚如上人へ、唯円直筆の『歎異抄』が手渡されたかもしれないとも言われている。

「善信が信心も、聖人の御信心もひとつなり」と言われた善信すなわち親鸞聖人、そして、「源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信坊の信心も如来よりたまわせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。」と言われた法然上人。これらの言葉の思想的背景を、『教行信証』にたずねるならば、我一心としての如来回向であり、「三心一心」の思想であろう。「至心に回向したまえり」(十八願成就文)として成就された他力回向の法である。「信心と言うは、すなわち本願力回向の信心なり」(聖典二四〇頁)。

法然上人が、「別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」と述べられた言葉は、「この虚仮・雑毒の善をもって、無量光明土に生まれんと欲する、これ必ず不可なり」(聖典二二八頁)という宗祖の言葉があるように、如来回向の眞実信心としての正定聚の機は、邪定聚・不定聚の機とは隔絶しており、眞実報土の往生は、辺地・懈慢・疑城・胎宮としての方便化土の往生とは隔絶している。第十八願と第十八願成就の文によって、如来回向としての名号が成就した。如来の第十九願・第二十願の機は、合わせ鏡が見破るごとく、第十八願によって照らされてはじめて、邪定聚・不定聚として見破られるものであることが言われている。

金子大榮師が、病苦でお念仏が喜べないという故郷の母にあてた手紙の中に、次のような言葉がある。「御慈悲を喜んでお念仏申すのではなく、お念仏の申さるることが御慈悲であります。せつなまぎれの中からもお念仏の申さるるが御慈悲であって、それは母上の御はからいではありません。凡夫のせつなさに御慈悲が紛れ込んで、お念仏となつてくださるのであります。されば、お念仏を申して有難うとなるのではありません。お念仏の申さるることが有り難いのであります。お念仏の申さるること以外に有り難いことがあると思わるは、はからいであります。」(木越樹講話録『歎異抄をよもう』金沢教区)

「分かって分からなくてもいいから、とにかく、念仏を申して下さい。そして、念仏に育てられて下さい。念仏には、人を育てる力がある」という言葉をお聞きしたことがある。聞名として回向成就される称名。はからいを離れるのは、如来回向であるが故である。